

滝口悠生 小説家

八戸ブックセンターに最後に行ったのは、2020年1月末から2月にかけての四日間で、ブックセンターのギャラリーでも開催された柴崎友香さんの展示(『アイオワ/八戸 ～作家が滞在すること～』)とその関連イベントのためだった。

ブックセンターでのイベント以外にも、柴崎さんと是川小学校を訪問して特別授業に参加したり、製紙工場を見学したりした。そして毎日八戸のおいしいご飯とお酒を堪能した。

その後間もなく新型コロナウイルスの感染が広がりはじめ、これを書いている2022年5月の時点で、自分にとって最後の旅らしい旅があつた八戸の四日間だった。遠くへの移動や酒宴の自由を奪われた日々のなか、楽しかった八戸の旅を何度も思い返すうちに、思い出はどんどん輝きを増し、おいしいお酒や海産物の印象もあいまってなんだか竜宮城にでも行ったみたいな記憶になっている。でも八戸は竜宮城ではないからいつかまた行けるはずで、その日をずっと夢見ている。

お酒も海産物もおいしいが、公営の書店があり、大きな製紙工場もある八戸はまさに本の街でもある。小説を書いている、本になる紙がどうやって作られているか知る機会はなかなかなく、物書きにとって一度訪れる価値のある街だと思う。製紙工場の見学をしたときに、小説家を集めて見学ツアーをしたいですね、と柴崎さんと話していたのだが、本当にいつか実現したらいい。

八戸ブックセンターを訪れると、この街で暮らすひとたちの生活の一部にこのお店があるのだと感じる。若いひとと年配のひとと、熱心そうなひとと、ふらりと立ち寄っただけに見えるひとと、みんな店内になじんでいる。それはこのお店とお店の本棚が誰にも優しいからだと思う。本が好きなのは知っているはずだが、いい書店というのは、なんの気なしに訪れても必ず読みたい本が見つかる。その時その時の自分に寄り添い、手を差し伸べてくれる友人のような存在なのだ。

もちろん街に暮らしているのは書店に来るひとたちだけじゃない。街には本をあまり読まないひとだっていて。でもいい書店が街にあることは、その街に暮らすすべてのひとにとってきつといいことだ。誰かが本を読むと、その本はそのひとの暮らしに影響する。そしてそのひとの暮らす場所にも影響する。学校、職場、商店、公園、どんな場所にも誰かが読んだ本が必ず少しずつ影響しているはずだ。本だけじゃない。運動とか、料理とか、楽器の演奏とか、プログラミングとか、自分はしないけど誰かがしていることというのが誰にとってもあって、その影響が自分の暮らす場所にも巡ってくる。街というのはそういうふうできているのだと思う。だから街にいい書店があることは、おいしい食堂や、

きれいな景色や、賑やかなお祭りが街にあることと同じように、尊いことだと思う。

本を全然読まなかったひとが、急に本を読みたくなることだってきっとある。そんなときは八戸ブックセンターに行けばいい。必ず読みたい本が見つかる。

滝口悠生 yusho takiguchi

小説家

「アイオワ／八戸 ～作家が滞在すること～」
(2020)／本のまち読書会スペシャル「滝口悠生
さんに聞く ―「長い一日」連載完結記念―」
(2020)など

1982年東京都出身。2011年、「楽器」で新潮新人賞を受賞してデビュー。2016年『死んでいない者』で芥川賞受賞。著書に『愛と人生』(講談社)、『やがて忘れる過程の途中(アイオワ日記)』(NUMABOOKS)、『長い一日』(講談社)など。

